

## 中学校 国語科 学習指導案

指導者 皆戸 信乃

日 時	令和7年11月4日(火) 第3限 10:45～11:35
場 所	多目的教室
学年・組	中学校1年A組40人
単 元	「竹取物語」(東京書籍『新しい国語1』)
目 標	<ol style="list-style-type: none"><li>音読に必要な文語のきまりを知り、古典を音読し、古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しむ。 [知識及び技能] (3)ア</li><li>場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写を基に捉える。 [思考力、判断力、表現力等] C(1)イ</li><li>文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにする。 [思考力、判断力、表現力等] C(1)オ</li><li>言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を通して自己を向上させ、我が国の言語文化に関わり、思いや考えを伝え合おうとする。[学びに向かう力、人間性等]</li></ol>

### 指導計画(全13時間)

- 第一次 歴史歴仮名遣いについて知り、冒頭を音読する。 1時間  
第二次 「竹取物語」の読解。 11時間(本時 10/11)  
第三次 題名の理由について考え、作品の主題を確認する。 1時間

### 授業について

「竹取物語」は中学校古典の導入的教材として扱われることが多い。平安時代成立の本作は、多様な問題意識を孕んだ作品であり、現代でもその価値が評価される一方で教科書に採録されるのは一部である。間を補完する梗概は示されるものの、冒頭「なよ竹のかぐや姫」と終結「かぐや姫の昇天」の箇所が主として取り上げられるという絵本「かぐや姫」をなぞる形で構成されている。本単元では「竹取物語」の全文(本文と必要と思われる箇所に訳を付したもの。五人の貴公子の場面については、全て現代語訳で読ませた。)を読むことを通して、特定の箇所の読みでは部分的にしか窺うことのできない「竹取物語」の提出する問題意識(とそれに対する応答)を読み取り、現代の学習者の価値観の(再)形成を目指す。

本時では、月の都の人であるはずのかぐや姫の、天の羽衣を纏うと「心異」(心が地上の人(＝以下、人間)とは違う)になってしまうのだ、という発言を手がかりに、作品が提示する「穢き所」に生きる人間という存在について考え、学習者自身の人間観を相対化しながらその捉えなおしを図る。作品への批評的なまなざしを涵養しつつ、物語、古典作品を起点として現代の学習者のものの見方・考え方を見つめなおす契機としたい。

### 題 目 「竹取物語」から「人間」を捉えなおす

#### 本時の目標

- 歴史的仮名遣いに注意して読み、古典の世界に親しむ。  
[知識及び技能] (3)ア
- 描写を基に、作中に描かれる月の人、人間の性質、ものの見方・考え方を捉える。  
[思考力、判断力、表現力等] C(1)イ
- 作品の読解を通して「人間」について考え、自身の考えを表現しようとする。  
[学びに向かう力、人間性等]

### 本時の評価規準（観点／方法）

1. 歴史的仮名遣いに注意して読み、古典の世界に親しんでいる。（知識・技能／観察）
2. 描写を基に、作中に描かれる月の人、人間の性質、ものの見方・考え方を捉えている。  
（思考・判断・表現／観察、プリント）
3. 作品の読解を通して「人間」について考え、自身の考えを表現しようとしている。  
（主体的に学習に取り組む態度／観察、プリント）

### 本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
（導入） 本時の課題の確認。	本時で扱う場面の確認をし、課題について理解する。	・月の都の人であるかぐや姫の「心異になるなり」という言葉から、語り／語らせられたことにおいては、かぐや姫を／は自己を人間として捉えていることを確認し、かぐや姫のもつ人間らしさについて考えさせる。
（展開） 1. 月の人と人間の性質、ものの見方・考え方を整理し、かぐや姫と照らし合わせる。	月の人・人間の描写から、それぞれの性質やものの見方・考え方を捉え、かぐや姫との相違点・共通点を考える。	・作中に描かれる、かぐや姫と月の人との相違点及び人間（翁、姫、帝、貴公子たち）との共通点を指摘させる。 ・「いとほし」「愛し」「物思ひ」という言葉や大切な人へ向ける思い、その人との別れの場面に注目させる。
2. 自身の考える「人間」からかぐや姫を捉える。	自身の考える「人間」を基準とし、かぐや姫について考える。	・展開1と同様の観点、場面から想像させ、自分自身や自分が考える「人間」ならどうするかを考えさせる。 ・作中の人間の姿と自身の考える「人間」とを比較させる。
（まとめ） 本時のまとめ。	本時の学習を通して考えたことを記述する。	
備考 ・授業で用いた「竹取物語」は、室伏信助『新版 竹取物語 現代語訳付き』（角川ソフィア文庫,2001）による。		

## 実践上の留意点

### 1. 授業説明

本授業は、『竹取物語』『九 天の羽衣』の後半部分（かかるほどに～天人具して昇りぬ。）の読解を通して、かぐや姫の人間らしさについて考えながら学習者の人間観の（再）形成をねらったものである。本時に至るまで、かぐや姫の行動や心情をおさえつつ、翁や貴公子、帝の言動やそこから窺える人物像にも注目させながら読んできた。これは、彼らが作中に描かれる人間だからである。今回はそうした人間たちとかぐや姫とを照らし合わせ、情を抱く者たちに手紙を書き残そうとする愛情を獲得したかぐや姫の「人間」らしい姿を捉えて、自身の人間観と比較させることを目標とした。

授業の実際としては、「かぐや姫が手紙を書く目的は何か」という発問を切り口に本時の課題をつかませようとしたのだが、事前に本文をしっかり読むことができないままに進めたため、学習課題の理解に時間を要してしまった。また、月の人の性質は端的に本文中に書かれていることが多いが、人間については描写が広範にわたる。そのうえ、具体的な言動を思い浮かべることはできるもののそれを抽象化するのが難しい。しかし、生徒は月の人の性質と対応させながら整理を行っていた。結果として展開2を時間内に行うことはできなかったが、次時の生徒の記述には「愛情」のほか、随所に描かれる翁の喜怒哀楽の「感情」や身分を度外視した帝の「思いやり」等のキーワードとともに、それらと共通するかぐや姫の「人間」らしい側面への指摘がなされていた。「人間」という身近でありながら改めて注目したことのない事柄について考えるという、生徒への問題提起となったのではないかと考える。

### 2. 研究協議

研究協議では、主に次の三点について意見をいただいた。(1)整理の際の、観点や項目の提示、(2)生徒の発言の扱い方、(3)学習課題の設定。特に(3)について、①課題の提示の仕方、②課題の内容の二点から記述する。

まず①課題の提示の仕方について、今回は人間観に主眼を置き、自己の価値観の相対化を行うことを目指したが、中学一年生にとっては発展的な内容である。協議会では、導入段階で生徒に人間観という読解の柱を示していたのか、というご指摘があったが、本単元では行っていなかった。初めて読む古典作品を生徒はいかに読むのか、読みの方向を明示しないままどのような主題を導くのかを知りたいという興味や意図から、かぐや姫以外の人物の言動や人物像にも注目させつつも、単元の導入で「人間というものについて考える」という見通しを持たせぬまま読み進めていった。しかし、これが本時の学習課題のスムーズな理解を妨げる要因となった。第二次を始める際に予め提示しておくことで、唐突さが解消され本時の展開も取り組みやすくなったはずである。また、時間ごとに目標を示していたものの約十時間という長時間の読解に生徒の意欲が落ちてきていたように感じたが、読みの目的が不明瞭であったことに起因すると思われる。

次に②課題の内容について、発展的なものよりはまずは教科書の範囲をきっちりと扱うのが発達段階的にも適しているのではないかなどの意見をいただいた。全文を読むことに意義はあると考えるものの、教科書の適切な活用は工夫できたと考える。例えば、学習のてびきである。東京書籍『新しい国語1』のてびきには「この物語に見られる、千年以上たった今でも変わっていない人間の心のありようとは、どのようなものだろうか。話し合ってみよう。」という課題が設定されている。現代の人間との共通点を見いだそうとするのは展開2の活動と通ずる。加えて、現代との共通点が分かることによって古典世界との連続性も感じられるだろう。「変わっていない」と考えたことが自身の人間観だと自覚を促しながら、その他に作品中に様々に描かれる人間の姿を捉えさせ、新たな価値観の獲得や再構成を目指すという方法をとることもできたと考える。